

# 子育て支援と夫婦関係

—子ども家庭支援センターにおける支援活動に着目して—

汐見和恵（立教大学大学院社会学研究科博士課程後期）

## <要旨>

本研究は、子ども家庭支援活動が母親の育児支援にとどまらず、夫婦関係や家族支援になっているのかを検証する第一段階の調査である。子ども家庭支援センターを利用している親と子ども家庭支援センター職員との関わりに焦点を当て、親の育児不安、夫婦関係、生活ストレスなどの関連を分析する。研究方法として、東京都の子ども家庭支援センターを利用している親を対象にアンケート調査を行った。その結果、センター職員と親たちとの関わりでは、「子どものことについて話す機会がある」の肯定的回答が64%、「相談出来る雰囲気がある」の肯定的回答が80%、「家庭の状況もよく理解してくれている職員がいる」の質問の否定的回答が64.3%であった。育児不安、夫婦関係、生活ストレス、夫との子育て一体感については、それぞれ相関がみられた。さらに職員との関わりでは、夫婦関係、夫との子育て一体感との項目間に相関がみられた。結論として、職員の子どもへの関わりが親の子育てへの姿勢や子どもへの関わりに変化をもたらしていることから、子育て支援、親子関係支援としては、一定の効果をもたらしているといえる。夫婦関係や夫との子育て一体感にそれほど矛盾を感じていない母親の場合には、職員とのコミュニケーションをとりやすいが、逆の場合には職員とのコミュニケーションをとりにくいという傾向が見られた。その理由として、子ども家庭支援センターの支援が家族関係に悩んでいる親たちにとって心理的に距離を感じるものになっている可能性が考えられる。センター職員の「子ども家庭支援」が、子育て・母子関係支援であることに意義があるが、上記のような母親の訴えには現在の子ども家庭支援センターは十分に応えてはいないと言えるだろう。

## <キーワード>

親とセンター職員との関わり・夫婦関係・育児不安・家族支援の視点

### 【研究目的と分析の視点】

少子化対策、育児不安対策として、「子育て支援」が全国各地で急速に展開されている。東京都においても子ども家庭支援センターや地域子育て支援センターなどが地域の「子育て支援」の中心となっている。

現在、これらの施設の利用者は、ほとんどが専業の母親であり、父親の参加は少ないというのが現実である。子ども家庭支援センターの支援活動をみてみると、父親向けに育児講座を開設している施設も見られることから、子どもと母親だけを支援対象としているわけではなく、父親にも子育てに参加してもらおうというセンター側の意図を感じることができる。

しかし、現実の支援活動の大部分は育児中の母親へむけての支援である。その結果、父親の

育児への関わりを曖昧にしたまま、母親への育児負担の偏りを合理化してしまっていることはないだろうか。「社会的な子育て支援」が家庭での性別分業を克服する方向に向かうのではなく、育児を母親役割として固定する効果を生みだしている可能性がある。

大日向(1996,2000)、柏木(2001)、櫻谷(2002)らがすでに指摘しているように、母親だけが育児の負担を負った場合に、母親の育児不安やストレスが強いことが明らかにされている。

榎本、諏訪の調査では「地域の子育て支援センターを利用している母親の育児不安やイライラ感が、センターを利用しているにも関わらず解消されない」ことを明らかにしている。(諏訪,2002)

一方、近年の夫婦関係研究では、夫の子育て

への参加が妻の育児不安を減少させ、妻の夫への評価が高まることが明らかになってきている(牧野 1982, 加藤 1998, 松田 2001)。

このことは、夫婦関係が子育てを順調に行えるかどうかの重要な要因となっていることを示す。

本研究は、子ども家庭支援活動が母親の育児支援にとどまらず、夫婦関係や家族支援になっているのかを検証する第一段階の調査である。

子ども家庭支援センターを利用している親と子ども家庭支援センター職員との関わりに焦点を当て、親の育児不安、夫婦関係、生活ストレスなどの関連を分析する。

### 【調査方法と対象】

本調査は、東京都独自の事業である「子ども家庭支援センター」<sup>(1)</sup>を利用している親を対象に、2004年1月から2月にかけて実施した。子ども家庭支援センターは、センター開設から2年以上経過し、かつ広場事業を行っており、ある程度子育て支援事業の蓄積を積んでいるセンターに絞り、そこを利用している保護者を調査対象とした。

前述の条件を備えた19センター(2003年10月現在)のうち、協力が得られた18センターに、調査票を配布し回収箱を設置し回収した。配布数はセンターにより異なり、1センター20部~50部程度で、回収数は18センター、合計354票であった。

### 【調査票の構成】

- ①フェイスシート：性別、年齢、子どもの年齢とセンター利用の有無、同居家族構成、記入者属性、夫と妻の学歴、職業、通勤時間、住居形態。
- ②センター利用状況：参加している活動の種類、利用時間、センター以外の保育利用の有無、センター職員との関わり<sup>(2)</sup>。
- ③家庭における育児状況と家族関係：夫婦間の家事分担、育児分担、夫婦の会話、夫婦関係、育児サポートの有無、育児不安、ストレス、子どもへの暴力の傾向、性別役割分業意識など。

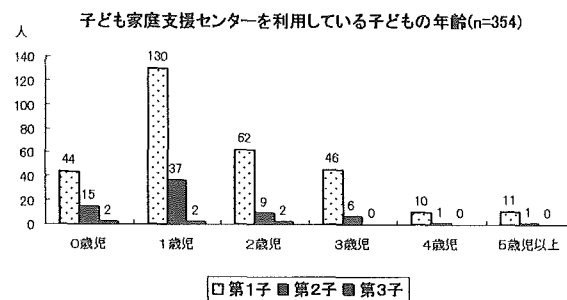
### 【結果】

#### 1. 回答者属性

回答者は、母親96.1%、父親2%、祖母0.7%であった。家族形態では、夫婦と子どもの核家族が全体の86.9%、夫婦と子どもと祖父母(どちらか一方も含む)の3世代家族が9.4%、ひとり親家庭(母子)が2.9%、ひとり親(母子)と祖父母(どちらか一方も含む)の3世代家族が0.6%、無回答が0.3%、回答者のほとんどは核家族の母親であった。平均年齢は母親32.4歳、父親34.5歳、母親は80%が無職の専業主婦、15%が有職(フルタイム、自営業、パートタイム)、父親の職業は常勤者もしくは自営業者が大半を占めた。

センターを利用している子どもは、全体の8割近くが4歳未満であった。最も多かったのは1歳児で第1子、第2子、第3子合わせて44.7%、ついで2歳児19.3%、0歳児16.1%、3歳児13.8%、4歳児、5歳児は合わせて6.1%であった。その中の約8割が第一子である。きょうだい関係では、ひとりっ子が74.2%、2人きょうだいが22.6%であった。(図表1)

図表1



#### 2. 子ども家庭支援センターの職員と親の連携・コミュニケーション

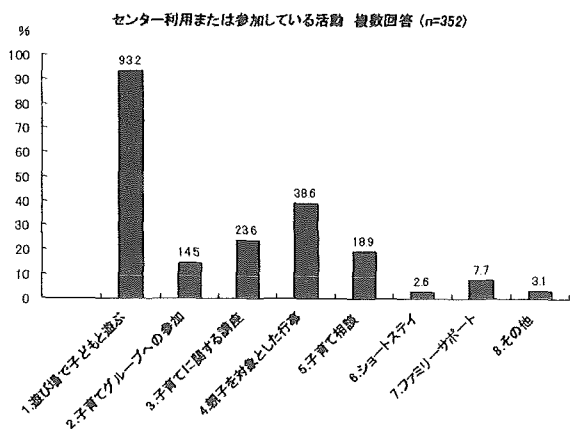
##### ① センター利用の仕方

センターの利用の仕方として多かったのは、「親子で遊び場(ひろば)で遊ぶ」が93.2%、「親子を対象とした行事に参加」が38.6%、「子育てに関する講座に参加」が23.6%、「子育て相談」が18.9%などであった。

子ども家庭支援センターへ来所する親子のほとんどが、遊び場(ひろば)へ参加し、そうした中から、親子で参加する行事に加わったり、

子育て講座や子育てグループに参加するという利用の仕方である。ショートステイやファミリーサポート事業を利用しているのは、合わせて10.3%であった。子育て相談は、18.9%であった。(図表2)

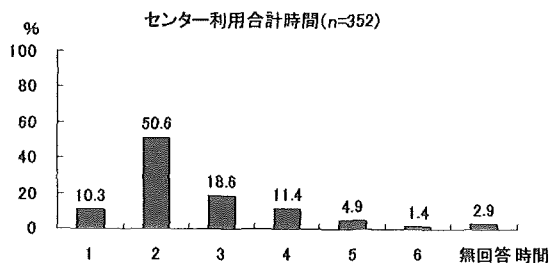
図表2



### ② センター利用の合計時間

センター利用の合計時間で最も多かったのは、2時間 50.6%、次が3時間 18.6%であった。1～3時間までの利用が全体の80%を占めていた。なかには、5時間、6時間の利用者も6%程度みられた。センターの利用時間は、概ね9:00～17:00前後であるので、午前中または午後を利用するというパターンが多いようであるが、5、6時間の利用の場合には、センターに昼食を持参して午前・午後と昼間のほとんどの時間をセンターで過ごしていると考えられる。(図表3)

図表3



### ③ センター職員と親との連携・コミュニケーション

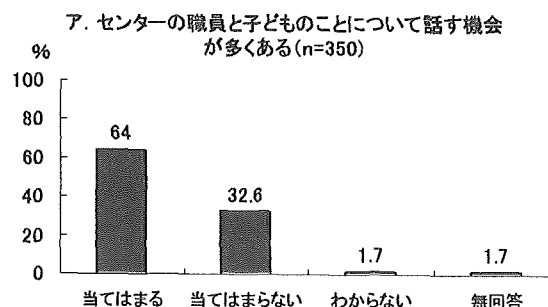
#### ア. センター職員と話す機会

「センターの職員と子どもの事について話す機会がある」と回答した親が64%と過半数以上

であったが、32.6%の親はセンターに親子で来所して広場を利用しているにもかかわらず、職員と話す機会がないという回答であった。

(図表4)

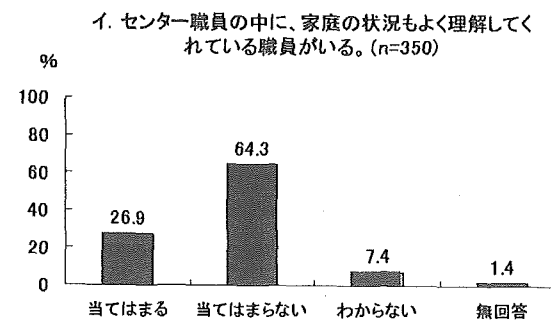
図表4



#### イ. 職員の家庭への理解

「家庭の状況までよく理解してくれている職員がいる」という質問には、64.3%の親が否定的な回答であった。肯定的な回答は、26.9%であった。職員と子どものことについて話すことはあっても、家庭のことなどそれ以上のことはなかなか話せないということがこの結果から推測できる。(図表5)

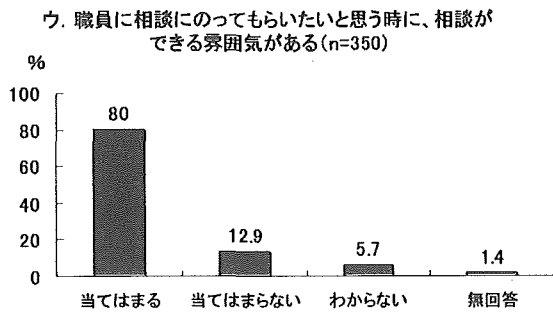
図表5



#### ウ. センターの雰囲気

「相談にのってもらいたいときに、相談できる雰囲気がある」という質問に対しては、8割が肯定的な回答をしている。否定的な回答は、12.9%であった。(図表6)

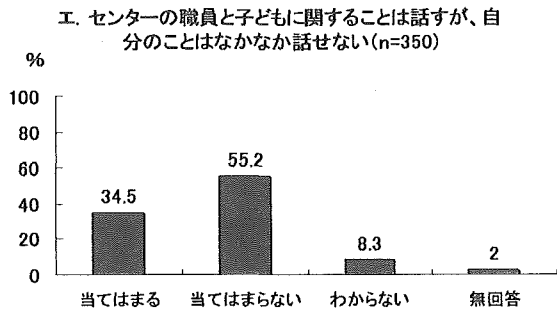
図表 6



エ. 職員との会話

「職員との会話で子どものことでは話せても、自分のことはなかなか話せない」という質問に、34.5%の親が「当てはまる」と肯定的な回答であったが、半数以上の人の子どものことや自分のことも話せると回答している。(図表 7)

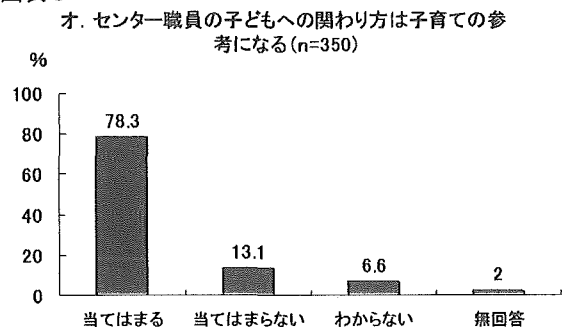
図表 7



オ. 子どもへの関わり方が参考になる

「センター職員の子どもへの関わり方が子育ての参考になる」という質問では、約 8 割の親が肯定的な回答をしている。否定的な回答は、13.1%と少数であった。(図表 8)

図表 8



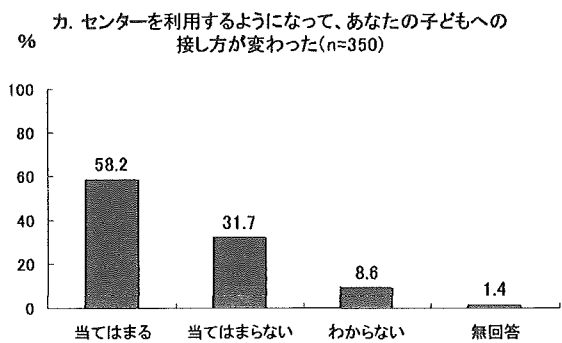
カ. 子どもへの接し方の変化

「センターを利用するようになってから、あなたの子どもへの接し方が変わった」という質問では、58.2%の親が「子どもへの接し方が変わった」と回答しているが、31.7%の親は「変わらない」という回答であった。(図表 9)

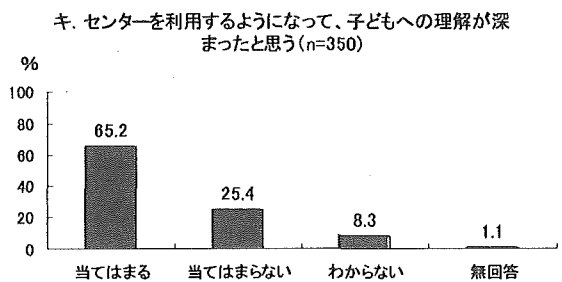
キ. 子どもへの理解が深まった

「センターを利用するようになって子どもへの理解が深まったと思う」という質問では、65.2%の親が「子どもへの理解が深まった」と回答している。一方、否定的な回答も 3 割程度みられた。(図表 10)

図表 9



図表 10



3. 夫婦関係、育児不安、夫との子育て一体感<sup>(3)</sup>と職員との関わり

次に子どもが生まれてからの夫婦関係の変化と育児不安<sup>(4)</sup>(育児に対する漠然とした育児不安感情と育児による育児疲労感に分けて測定)と夫との子育て一体感にどのような関連がみられるのか、それぞれの相関をみてみた。

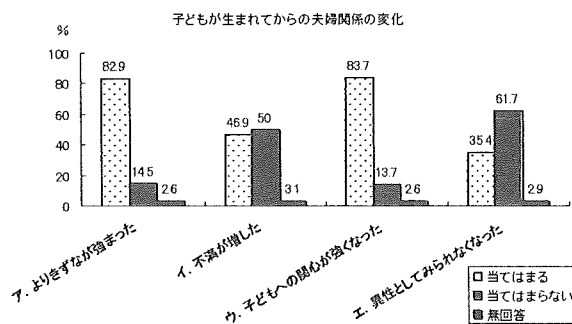
さらにセンター職員との関わりについてもみていきたい。

### ① 夫婦関係<sup>(5)</sup>の変化

子どもが生まれてからの夫婦関係の変化では、8割以上の方が「より絆が強まった」と回答しているにもかかわらず、半数近くの方は「配偶者への不満が増した」と回答している。

また配偶者を「異性として見られなくなった」という回答も4割弱見られた。(図表 11)

図表 11



### ② 夫婦関係、育児疲労感、育児不安感情、夫との子育て一体感と職員との関わり

夫婦関係、夫との子育て一体感については、4項目(それぞれ1~4点)、育児疲労感、育児不安感情、については5項目(それぞれ1~4点の合計値を、「夫婦関係得点」「子育て一体感得点」「育児疲労得点」「育児不安感情得点」とした。(いずれも得点が高くなるほど、否定的傾向を示す。)

これらの項目のそれぞれの相関関係をみたところ、次のような結果であった。

夫婦関係、夫との子育て一体感の項目には、強い正の相関がみられた。夫婦関係得点が高いほど、夫との子育て一体感の得点も高くなり、夫婦関係得点が高いほど夫との子育て一体感の得点も低い傾向がみられた。このことから、夫婦関係のきずなが強まったと感じている場合は夫との子育て一体感を感じている傾向がみられ、夫婦関係で不満が生じていたりする場合に、夫との子育て一体感をそれほど感じていない傾向がみられた。

さらに、夫婦関係、夫との子育て一体感と育児疲労感、育児不安感との項目間にも相関がみられることから、夫と一緒に子育てをしている

と感じている場合には、育児疲労感、育児不安感情の得点が低くなり、その逆の場合には育児疲労感、育児不安感情の得点も高くなるという結果であった。(図表 12)

次に育児疲労感、育児不安感情、夫婦関係、夫との子育て一体感と職員との関わりについての相関をみてみた。すると、夫婦関係と夫との子育て一体感で、職員との関わりに相関が見られた。夫婦関係、夫との一体感の得点が高いほど、職員との関わりの得点が高く、夫婦関係、夫との一体感の得点が高いほど職員との関わりの得点が低かった。(図表 13)

図表 12

	育児疲労	育児不安感情	夫婦関係	子育て一体感
育児疲労	1.00	.572**	.261**	.283**
育児不安感情	.572**	1.00	.265**	.261**
夫婦関係	.261**	.265**	1.00	.518**
子育て一体感	.283**	.216**	.518**	1.00

\*\* 相関係数は1%水準で有意(両側)です。

図表 13

	育児疲労	育児不安感情	夫婦関係	子育て一体感
職員との関係得点	.068	.101	.129**	.163**

### ③ センター利用時間の長短と夫婦関係、育児不安、生活ストレス<sup>(6)</sup>、職員との関わり

親のセンター利用時間の長短によって、夫婦関係、育児不安、生活ストレス、職員との関わりなどに違いがあるかという点に注目してみた。

センターの利用時間の合計が2時間以内のグループと5時間以上のグループの夫婦関係得点、育児疲労得点、育児不安感情得点、生活ストレス得点、職員との関わり得点の平均を比較してみた。

その結果、センターの利用時間の合計が5時間以上のグループの方が2時間以内のグループより、育児疲労得点、育児不安感情得点、と生活ストレス得点の平均値が高かった。しかし、職員との関わり得点においては、センター利用が2時間以内のグループに比べて5時間以上利用しているグループの方が得点が低かった。(図表 14)

図表 14

センター利用における比較 (平均)		
	利用 2 時間グループ (n=178)	利用 5 時間以上グループ (n=19)
育児疲労得点	12.08	12.89
育児不安感情得点	13.30	14.00
夫婦関係得点	9.47	9.58
職員との関係得点	16.63	15.71
生活ストレス得点	12.28	13.83

### 3. センター利用への自由記述から

センター利用に関して、調査票に自由記述欄を設けたところ、肯定的なもの、批判的なもの、希望など様々な意見があった。そのなかの肯定的なものと批判的なものをさらに項目ごとに分類した。

#### ① センター利用に対する肯定的な意見

センター利用に対する肯定的な意見を分類すると、「母親自身の癒し」「他児との交流」「子どもの変化」「職員に対するもの」「施設環境」などがあった。

具体的には、「子どもと 2 人きりだと息が詰まる。家の中では遊びに限られるし、特に今の時期は室内の遊び場を利用できると非常に助かる」「子どもが小さい頃は泣いてばかりで 2 人で家にいるのがつらく、逃げ場所のような感じで利用していましたが、センターで多くの友達ができ、行事やサークルにも楽しく参加できるようになりました」「母親同士のコミュニケーションが持て気分が晴れる。子どもも少しずつ慣れしてきているので、うれしい。生活リズムも必要である」「センターに行くようになり、最初は私にベタベタくっつき離れなかったのが、半年くらい経った頃から友達と遊ぶようになり、先生たちにもなつき、社交性が出てきて活発になった」「(職員は) いつも温かく見守ってくれている」「職員も一緒になって遊んでくださり、『ひとりで育てているのではない』『みんなもがんばっているから私にもできる』という気持ちになりました」「広くてきれいで、いろいろなおもちゃがある」「子どもがのんびり過ごせる場で、居心地がよい」などの意見があった。

#### ② センター利用に対する批判的な意見

センター利用に対する批判的な意見には、「施設の設置環境」「職員への不満」「利用内容」「孤

独感」「情報不足」「他の母親への不満」などがあつた。

具体的内容としては、「(センターの) 場所が遠い」「(施設の) 数が少ない」「年配の職員に相談したいとは思わない。たまに話をするけれど、なんとなく偉そうというか自分は何でもわかっているような口調で話されると嫌になる」「職員の存在価値が疑問。あの人達は何をしているのだろう・・・」「16 時閉館は早すぎる。皆夕方の子どもの過ごし方に苦勞しているのに・・・」「いろいろな時間帯があればもっと利用できる」「遊び場で中に入りづらく、子どもと 2 人で遊んでしまうので、少し橋渡しの事をしてほしい」「お父さん達はなかなか利用しにくいらしく、利用者が少ないので、もっと利用しやすいとよい」「母親のグループが出来ていて、あまり気分良くないときがある」「幸せな母子ばかりいて、夫とのことや金銭的なことで悩んでいたとしても、それは隠して見栄を張ってでも幸せな姿を演じなくては・・・と感じ、時々行くのをためらう時がある」「他の母親のマナーが悪い人がいる」などであった。

### 【結果の考察】

#### 1. 親とセンター職員とのコミュニケーション

子ども家庭支援センター職員と利用者である親たちとの関わりをみると、多くのセンターでは子どものことについては気軽に話せる雰囲気があることがわかる。それは、「子どものことについて話す機会がある (図表 4)」の肯定的回答が 6 割以上であったことや、「相談に出来る雰囲気がある (図表 6)」の肯定的回答が 8 割であったことなどから推察できる。自由記述にも「職員の方々が子どもを気にかけてくれて、いろいろ教えて頂くことも多く、大変助かっています」という記述などが見られる。

しかし、「家庭の状況もよく理解してくれている職員がいる (図表 5)」の質問の否定的回答が 64.3% だったという調査結果から、自分の悩みや家庭のことを職員に話せるような関わりはなかなか持てないということが推察される。

多くのセンターでは、職員がひろばに出て、それとなく親子の関わりを見守っていたり、時

には子どもと一緒に遊んだり、親たちと話をしたりしながら子どもを見ているというような雰囲気であったが、センターによっては、親子が遊ぶひろばに職員が出ておらず、職員の部屋に待機し、必要なときだけひろばで出かけていくというセンターもあった。

このようなセンターでは、職員が何をしているのか、このセンターの支援の目的が何かということが親に伝わりにくい。さらに、慣れないセンターでどのように遊んでいいかわからなかったり、既に来ている親子に対して、どのように関わったらよいかわからずに戸惑ったり、孤独感を感じてしまったりする場合さえあることがあるようである。自由記述をみると、「職員の存在価値は私にとって疑問、あの人達は何をしているのだろう」「遊び場で中に入りづらく、子どもと2人で遊んでしまうので、少し橋渡しの事をしてほしい」「今月から子育て広場を利用しているが、利用方法がよく分からない」などの意見がみられた。

## 2. 親の子どもへの関わり方の変化

親子でセンターを利用するようになり、子育てに関して、親自身に変化があったと回答した割合が高かった。

「センター職員の子どもへの関わり方は子育ての参考になる」という質問の肯定的回答が約8割、「センターを利用するようになって、あなたの子どもへの接し方が変わった」の肯定的回答が約6割、「センターを利用するようになって、子どもへの理解が深まったと思う」の肯定的回答が7割近くという結果であった。

おそらく、他児の親の関わり方や職員の子どもへの関わり方が参考になり、自分の子どもへの関わり方に変化が見られたと思われる。

さらに、子ども自身に変化が見られたことが親の喜びにつながっていることが、自由記述からうかがえる。

「子どもの顔がとても楽しそうで、家にいる顔とまた違ってうれしくなる」「何回か来るうちにセンターに慣れ、とても楽しそうに遊んでいます」「最初は私の周りにベタベタくっつき離れなかったのが、半年くらい経った頃から友達と遊

ぶようになり、先生たちにもなつき、社交性が出てきて活発になった。」などの意見があった。

子ども家庭支援センターの子育て支援については、親の期待をある程度満たしているといえるのではないだろうか。

## 3. 育児不安、生活ストレス、夫婦関係、夫との子育て一体感と職員との関わり

夫と子育ての一体感を感じている妻ほど夫婦関係により評価をしており、逆に夫と子育て一体感が少ない妻ほど夫婦関係の評価が低かったという結果が得られた。このことは、夫婦において子育てという協働行為が夫婦の関係性に影響を与える要因であることを実証した結果となった。

子どもを持ってからの夫婦関係の変化で、約8割の親が「よりきずなが強まった」と回答しているにもかかわらず、その半数が「不満が増した」と回答している。このことから、子育て中の夫婦関係は、子どもが生まれたことで絆が深まったという肯定的な側面ばかりではなく、子どもが生まれたことで相手への不満が生じるなど、複雑な心理的な葛藤を含んだものであることがわかる。

育児不安、生活ストレス、夫婦関係、夫との子育て一体感と職員との関わりでは、夫婦関係と夫との子育て一体感に相関がみられたことから、夫婦関係が比較的良好であると感じていたり、夫との子育て一体感を感じている場合に、職員との関わりを肯定的に評価する傾向がみられ、逆に夫婦関係に不満や問題を感じていたり、夫との子育て一体感を感じられない傾向がある場合には、職員との関わりに対する評価が低い傾向がみられた。

## 4. 親のセンター利用パターンとセンター職員との関わり

次に親のセンター利用時間の合計が短時間の場合と長時間の場合に分けて、職員との関わりの違いをみてみると、親のセンター利用の仕方に、大きく分けると2つのパターンがあることがわかる。

一つは、センターを生活の中の一部として

2,3時間を過ごす場合であり、もう一つは日中子どもと過ごす時間の大半をセンターで過ごす場合である。ほとんどの親子は前者の利用であるが、少数の親子では後者のような利用の仕方も見られた。

センター利用時間の合計を2時間以内と5時間以上のグループに分けて夫婦関係、育児不安、夫との子育て一体感と職員との関わりを見た結果から、以下のことが考えられる。

5時間以上センターを利用しているグループの夫婦関係、育児不安、夫の子育て一体感の得点は、2時間以内のグループに比べてすべて高かったが、職員との関わりでは2時間以内の利用のグループより得点が低かった。

つまり、利用時間が2時間以内のグループでは、センター職員との関わりの時間が少ないため、職員といろいろな話す機会が少ないので、職員との関わりが希薄な傾向がみられる。

逆に5時間以上センターを利用するグループでは、長時間センターにいて、短時間利用の人より職員と子どものことを話したり、相談にのってもらえる機会が多いと思われる。

### 【結論】

センターを利用している多くの母親が「子どもへの接し方が変わった」「子どもへの理解が深まった」という質問に対して肯定的な回答をしたことは、子ども家庭支援センターの子育て支援、親子関係支援が、母親にとって心強いサポートであるということを示唆している。柏木(2001)は、複数の人による子育ての効果を「親自身が他の子どもを見ることで、子どもに対する理解を深めること」と、「子ども自身が親以外の大人やその他の子どもとの関わりによって変化する」こと等であると述べている。同様に、センター職員の子どもへの関わりが親にとって参考になるだけでなく、親同士、子ども同士の関わりが、自分の子育て、あるいは子どもを客観視する機会となり、結果的に子どもに対する接し方や見方が変化したと言えるだろう。この点については、センターを利用する意味が大きいと考えられる。

親と職員とのコミュニケーションの調査結果

から、センターでは子どもの話や自分のことを気軽に話す雰囲気はあるようだが、親が家庭の状況まで話せるような関わりを職員と持つことは少ないと思われる。

また夫婦関係、夫との子育て一体感と職員との関わりの結果から、夫婦関係や夫との子育て一体感にそれほど矛盾を感じていない母親の場合には、職員とのコミュニケーションをとりやすいが、逆の場合には職員とのコミュニケーションをとりにくいという傾向が見られた。

つまり、母親が夫婦関係などで悩んでいた、家族のことで困っていたりしても、なかなかそれを言い出すことはできず、当たり障りのない会話ですませていると推察することが出来ないだろうか。

結局、子ども家庭支援センターの支援が家族関係に悩んでいる親たちにとって心理的に距離を感じるものになっている可能性が考えられる。

母親の自由記述に「支援センターにはやはり幸せな親子ばかりいて、夫のことや金銭的な事でたとえ悩んでいたとしてもそれは隠して見栄を張ってでも幸せな姿を演じなくては・・・と感じ、時々行くのをためらう時がある。」という意見があった。

センター職員の「子ども家庭支援」が、子育て・母子関係支援であることに意義があるが、上記のような母親の訴えには現在の子ども家庭支援センターは十分に応えてはいないと言えるだろう。

### 【今後の課題】

今回の調査では、センターの主な利用者である母親の側から、子ども家庭支援センターの支援についての分析を試みた。次の段階としては、支援提供者としての子ども家庭支援センター職員を対象に、どのような支援を「子ども家庭支援」と考えているのかを探していきたい。

さらに、子ども家庭支援センターの機能を家族支援として位置づけるとすれば、父親および一人親家庭、さらには3世代家族の祖父母など、対象を拡大して調査を行うことによって、センターの家族支援としての視点がより一層明確になるだろう。



## 【参考文献】

- ・ 榎本二三子、諏訪きぬ 2002 「子育て支援のあり方の再検討—育児ストレスと育児期ストレスの視点から—」『保育学研究』第40巻第1号
- ・ 大日向雅美・春日キスヨ・佐々木正美他 1996「最近の子育て不安と母親の心理」『現代のエスプリ』342 至文堂
- ・ 大日向雅美 2000『子育てがいやになるときつらいとき』主婦の友社
- ・ 柏木恵子『子育て支援を考える—変わる家族の時代—』2001 岩波ブックレットNo.555
- ・ 加藤邦子 1998 「幼児期の子どもを持つ母親の生活満足度を規定する要因—育児支援 との関わりを中心に」『家庭教育研究紀要』20 財団法人小平記念会 家庭教育研究所
- ・ 牧野カツコ 1982 「乳幼児をもつ母親の生活と《育児不安》」『家庭教育研究紀要』3 財団法人小平記念会 家庭育研究所
- ・ 松田茂樹 2001「育児ネットワークの構造と母親のWell-Being」『社会学評論』vol.52,No.1 他
- ・ 各子ども家庭支援センターの事業概要（44ヶ所）

## 【注】

- (1) 子ども家庭支援センター：平成7年に開始された東京都独自の事業。設置主体は、区市町村である。地域における子ども家庭支援システムの中核として関係機関と連携しながら、子ども家庭支援ネットワークを構築する役割を有する。基本的な機能は、1) ケースマネジメントの手法による総合相談、2) ショートステイ、トワイライトステイ等の在宅サービスの提供・調整、3) 関係機関との連携による援助計画の作成・実施、4) 地域組織化活動（共助グループの育成とボランティア活動の推進）
- (2) センター職員との関わり：センター職員と親の連携とコミュニケーションについてたずねており、7項目からなり、回答は「当てはまる」「まあ当てはまる」「あまり当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」の3段階である。
- (3) 夫との子育て一体感の項目：「配偶者と一緒に子育てをしている一体感がある」「配偶者は子育てをあなたにまかせており、あまり関わっていないと思う」「子育てについての心配事や悩みを配偶者に話すことができる」「配偶者の子どもへの接し方に満足している」
- (4) 育児不安：牧野カツ子は育児不安を測定するにあたり、「育児不安尺度」を作成した。その内容は14項目にわたり、「一日がとても長いと感じる」「毎日ぐたぐたに疲れる」などである。しかし、それらの項

目には、子育てにおいて異なる意味があると考え、「子どもがわずらわしくて、イライラしてしまう」などの育児疲労感と「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある」などの育児不安感情とに分類して分析をした。

- (5) 夫婦関係については、大日向雅美の親密性尺度6項目（「よりきずなが強まった」「夫（妻への）不満が増した」「お互いに関心が薄れた」「夫の発言力が強くなった」「妻の発言力が強くなった」「以前と変わらない」）のうち、2項目を使用し、「お互いへの関心より子どもへの関心の方が強くなった」「配偶者を異姓としてみられなくなった」については、汐見（2000）の夫婦関係の分析枠組みから使用した。
- (6) 生活ストレス：8項目（それぞれ1～4点）のストレス尺度を使用し、「この1週間」の状況についてたずねている。「ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと」「何をしても面倒と感じたこと」「ふだんより口数が少なくなったこと」など。